

「聖なるランドスケープ」は、私たちの生活の中で真に永続するものは何かということを思い出させてくれる。

現在は、新しい文化へシフトするための進化のポイントにきている。これまでの文化を完全に認識し統合しながら、新しい意識を形成するときだ。それは、過去に戻ろうとするのではなく、過去の精神の在り方を「再構成する」ということだ。次の文化は「エコロジカル・統合」である。それは、対立していると誤解されがちな自然と近代技術を調和させるものでもある。

私の理想は、古きものと新しきものが混在して織りなす「聖なるランドスケープ」が、建築や都市の中で生きるような知恵や創造力を私たちがもつことである。

世界中で、様々な分野の人が新しい道を探している

その動きはまた、私たちの生活に大きな影響を及ぼしている

シム・ヴァンダーリン「聖なるランドスケープと希望の幾何学」  
Thoughts On Sacred Landscape and the Geometry of Hope



# BIO City

A Magazine for Sustainable Future.  
ビオシティ

「生命都市」時代の環境と地域づくりを考える総合誌

発行/株式会社ビオシティ 発源/大学図書・備山社販売  
〒107-0062 東京都港区南青山2-4-8 須賀ビル302  
特別価格2,800円(税別)  
ISBN4-7972-1016-8 C0336 ¥2800E

BIO City 1999/10.16

◆特集◆「崇りご利益のエコロジー」日本の生態学とデザイン

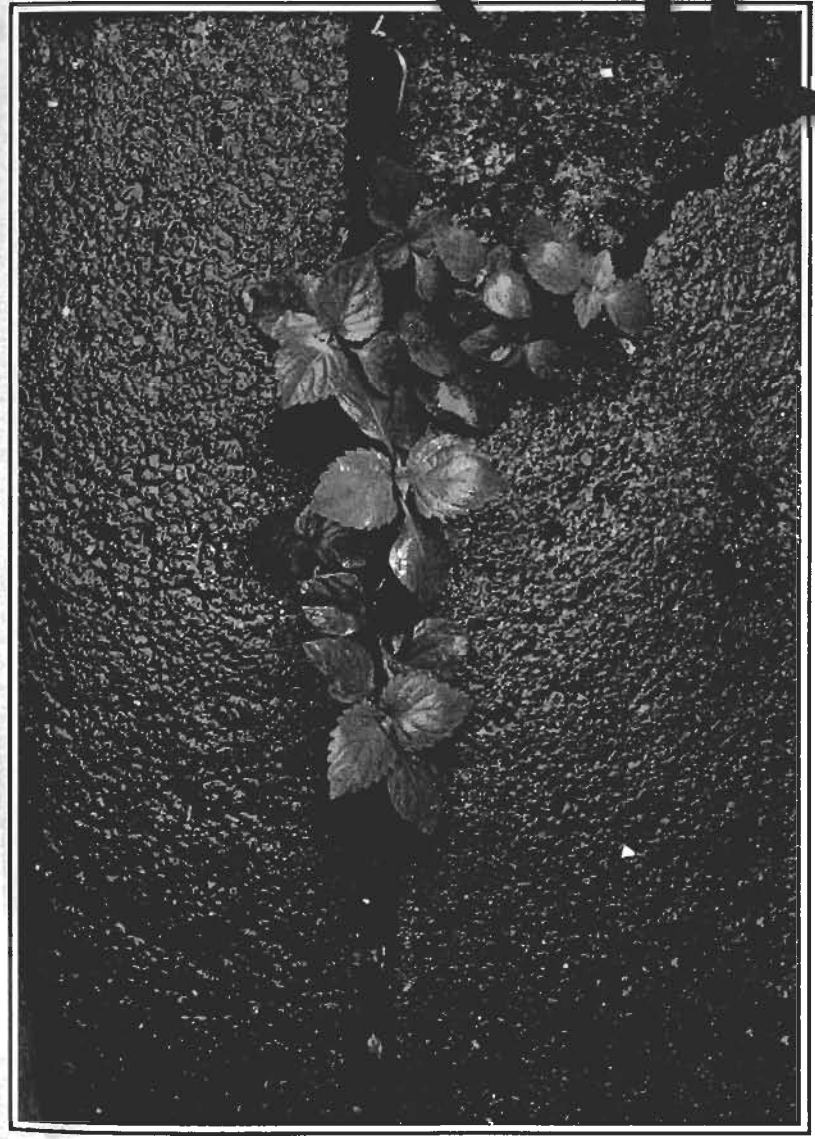
◆◆◆ゴランティン

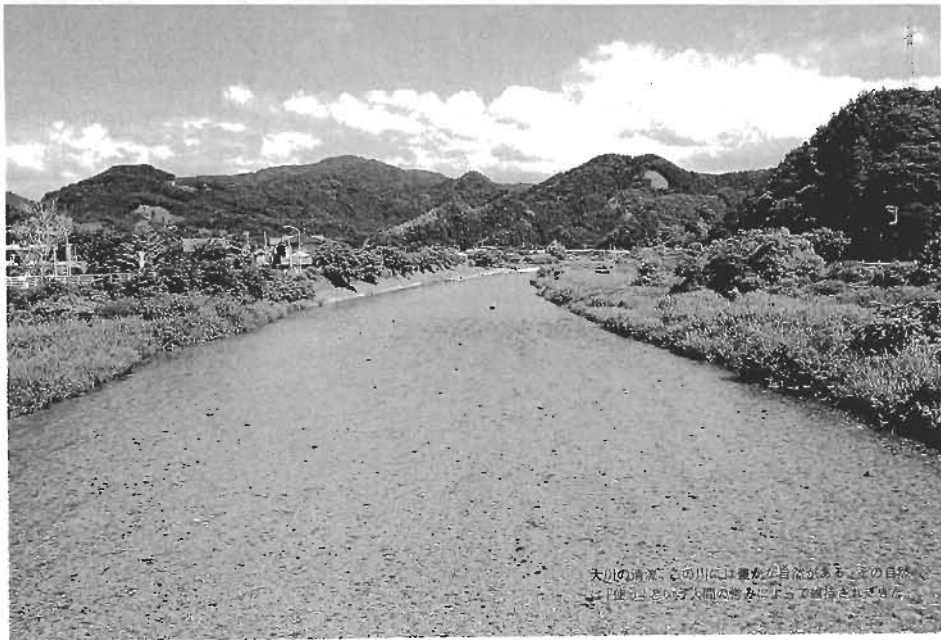
「生命都市」時代の環境と地域づくりを考える総合誌  
1999/10.16

◆特集◆「崇りご利益のエコロジー」  
日本の生態学とデザイン  
聖なるランドスケープと希望の幾何学  
Thoughts On Sacred Landscape and the Geometry of Hope  
シム・ヴァンダーリン  
日本の景観  
“ふるさとの原型”からのプランニング

# BIO City

A Magazine for Sustainable Future.  
ビオシティ





大川の清流。この川には豊かな自然がある。その自然は「使う」として人間が暮らしによって維持されてきた。

# 川に生きる男と女の“伝承的エコシステム”

## 新潟県、大川の菜園(女たち)とサケ漁(男たち)

菅 豊

北海道大学文学部 民俗学

清流、大川。この川の豊かさは、偶然生み出されたものではない。

また、「エコロジー」という思想で意図的に保存されてきたものでもない。

それは、沿岸住民の長い年月にわたる生活のなかで、(川を)「使う」という行為を通じて形づくられ、

伝承されてきた豊かさなのである。

### 伝承されてきた大川の豊かさ

新潟県岩船郡山北町大川郷。新潟県の最北端に位置するこの町を、大川という清流が貫いている。汚れた水を流し込む人の数がさほど多くないぶん、この川は透きとおりと、多くの魚類を育んでいる。この川を見た人は、その自然の豊かさを間違いなく確信することができる川である。この川は、アユ釣りなど遊魚という形で、地元住民以外の人々にも開放されていて、解禁日を

過ぎると多くの太公望たちで賑わう。

この川に赴いた太公望たちは、この川にいったい何を見るだろうか。きっと彼らは、川のなかに、直接魚を見出すであろう。彼らは、遊魚料を支払う代わりに、魚類の再生産や川の管理を含め、魚を捕るという行為に不可分な仕組み、ある意味で面倒な枠組みから逃れることができる。そして、自然と対峙する最終的な局面だけに参加することができる。

もう何度も、この川を訪れた釣り人

ならば、どこにアユが多いかを熟知している。また、彼らはそのポイントに自由にアクセスすることができる。そこに、もし他の釣り人がいたとしても、マナーといった程度の束縛を除けば、その他者の存在は川のなかの行とさほど変わらないし、かわる必要もことさらない。川には、自分という個と魚との直接的な関係が中心に見据えられている。このような関係性からいえば、彼らの川への接し方、川の見方は、生活のなかで川と濃密にかかわり、



河原の菜園。大川の河原において、女衆はさまざまな野菜づくりを行っている。



カワラバタケでは、多様な作物を自家用としてつくる。また、生活を彩る花もカワラバタケの重要な産物である。このような花は彼岸や盆の、先祖をおまつりするときは欠かせない。

川をめぐる仕組みをつくりあげ、それを維持してきた人々とは明らかに異なっている。普通の釣り人には、川をどんなに釣り歩いて、魚の多いポイントを熟知しても、この川のすべては見えてこない。また、彼らは、この川をまぐるごと背負う必要もない。

しかし、この川の豊かさは、偶然生み出されたものではなく、また、「エコロジー」という思想で、自然というものに本質的な価値を認めた上で、意図的に保存されてきたものでもない。それは、沿岸住民の長い年月にわたる生活のなかで、釣り人以上に濃密な「使う」という行為を通じて形づくられ、伝承されてきた豊かさなのである。この「使う」という行為は、その行為を続けるための、利用の伝承的仕組みというものによって支えられている。その仕組みは、川とともに暮らす生活者以外の眼には見えにくい。確かにこの川を包み込んで、沿岸住民の行動を律している。そして、この川をめぐる仕組みは、動植物など自然と、それを利用する人との直接的な関係を規定するばかりではない。さらに、人と人といった関係についても規定している。

大川郷は、川筋に沿ってわずかな水田が広がるが、その大方の部分は山林で占められている。そのため、古くから水田稲作以外に、主として山とのかかわりで生計を立ててきた。また、川からも少なからぬ生活の糧を得てき

た。大川沿岸の人々は、現在でも川と密接にかかわっている。それは、女衆の菜園づくりと男衆のサケ漁という形であらわれている。

### 女たちの世界 —河原の菜園づくり—

#### 不安定な自然のなかの 曖昧な“決まり”

雪が降り積もらない季節、女衆は河原にさまざまな菜園をつくる。このさまざまな菜園づくりも、男衆が行うサケ漁も、同じく花地の仕組みによって律せられている。ただ、菜園づくりには厳格な組織もなければ、またはっきりとした「規制」というものも存在しない。それは、昔から受け継がれている曖昧な不文律という緩やかな仕組み＝「決まり」程度でしかない。しかし、それはいまでも重要な意味をもって利用する人と人をつなげ、その結果、人々の行動を律している。

当たり前だが、大川にごみを捨ててはならない。大川の所々に広がる河原には、全国の河川に見られるようなごみの不法投棄はほとんどない。少なくとも、女衆が手をかけている菜園の周りにはごみは見受けられない。もし、方が一、心ない者がごみを捨てたとしても、それはすぐに女衆によって片づけられるであろう。なぜならば、彼女たちは、プラグマティックに河原を「使う」という意図をもってしているから

である。

大川の高木敷は砂礫質で、本来はカヤ、ヨシなどが繁茂するアラシ(藪蕪地)である。大川のほとりに生活する女衆は、その河原を丹念にカイタクして十数坪の菜園をつくる。この菜園はハタケ(常畑)に対してカワラバタケ、カワラノハタケと称される。

カワラバタケでつくられる産物は非常に多様であるが、そのすべてが自家消費用である。春から夏にかけてジャガイモ、サツマイモ、カラトリイモ(サトイモの仲間)、ニンジン、トウモロコシ、ダイズ、アズキ、ササギ、トマト、ナス、キャベツなどがつくられ、秋口からはダイコン、ハクサイ、ネギ、サトマメなどがつくられる。ダイズなどは、自家用味噌をつくるためのものでジマメと称される。普通、山のナギノ(桃さし)でつくられるアカカブ(温海カブ)もつくることがあり、そういうときは赤の発色をよくするため、草を焼いて土に混ぜるとよい。季節に応じてメロンなどの果物もつくり、また、一年中季節の花を咲かせている。これは、仏様に供えるためのものである。

カワラバタケの作物は、よくムジナ(タスキ)やカラスに食べられる。しかし、そんなことに憂える女衆はいない。また、このカワラバタケは、高木敷のため大水が出ると根葉に冠水してしまう。当然、余減ということも珍しくない。だが、流されて元々という気分



女衆は、石がたくさん転がっている河原で、丹誠込めてカワラバタケをつくる。出てきた石は、邪魔にならないように角にひとまとめにしておく。



耕しているときに出てきた石を使って、簡単な圃との境をつくる。

右ページ：コドでのサケ漁。生産、労働効率が低い伝統的な漁法は、いまでもほとんどの大川にしか残っていない。



でつくっているから、そのようなアクセシビリティにも、女衆はくじけることはない。

大水を防ぐための工夫をすればよいとも考えられるが、彼女たちは積極的に大水に備えることはない。菜園に対する女衆の働きかけといえば、耕し、大小の石を丹念に取り除き、他の人との菜園の境にちょっとした石積みをする程度である。もともと地力があるので、現在の丹念さとは裏腹に、河原の菜園は耕作地としては非常に不安定なのである。この不安定さは、人力の限界によって規定されたものではなく、ある程度、暗黙の“決まり”によって規定されている。過剰な地面の昇級と強固な壁に囲まれた完全な耕作地は、カワラバタケにはそぐわない。そこはあくまで河原なのである。そのような感覚は、菜園の立地する場所の帰属性ともかかわってくる。

昔からこの河原を菜園として使う場合、いくつかの集落が共同で利用していた。利用権は明確には定められていなかった。現在は、大川は二級河川であり、川、河原自体は完全に国の公物であって、県知事がその機関委任事

務管理にあたっている。厳密に言えば、そのような場における菜園づくりは、日本全土を画一的に縛る枠組みに抵触するであろう。しかし、そういう拘束子規的な解限を無意味なものとして再認識させるほど、ささやかな営みとしてしか菜園づくりは存在しない。不安定な耕作地は、まさに一日のうちにもとの河原へと復する不完全さにおいて、現在でも意味があるのであって、昔からその法を超えると、土地の所有権、利用権といった厄介な問題を引き起こしかねなかったのである。

### つきあいの場(コミュニティ)としての菜園

カワラバタケを新規にカイタクするときは、人の手の人っていない、あるいはかつて利用されていたがいまは放棄されたようなアラスならば誰が行ってもよい。たいてい、自分の集落に近いところでやるので、自然と集落ごとのある程度のまとまりが生まれるという。カワラバタケを広げるときは、たいたいはすでにある自分のカワラバタケから川の低水敷に向かって連続して切り拓くのが“決まり”である。ただ、すでに他の人がそこをカイタク

していたり、また、自分のカワラバタケの周りが他の人のカワラバタケに取り囲まれていたりすると、離れたところから新しいカイタク地を求め。

先に、カワラバタケの作物は自家消費用であることは述べたが、売るほどつくろうとすると、カワラバタケの面積を格段に広げなければならない。しかし、誰もそれほど大きな野心をもってカワラバタケの利用に臨んでいないし、もしそのようなことをすれば、何らかの軋轢を生むことを、誰しも知っている。河原には使用者の異なる小さな菜園がモザイク状に錯綜しており、自分の周りのカワラバタケの利用者は日常的に特定できるものの、ちょっと離れたと誰が使っているかわからないことも多い。細かく利用している限り、その使用者の匿名性は別に問題にならないが、普通に人に大きくカイタクしたときには、「誰が広げたのか」ということが問題になるのである。明文化されてはいないが、暗黙の緩やかな“決まり”によってその面積、用途は律せられているといえる。

とはいうもの、自分の使っているカワラバタケを、自分のものであると認識する意識は曖昧ながらも存在する。そ

してその意識は他者にもおよび、他人の使っているカワラバタケは他人のものであるとの意識につながる。だから、他人のカワラバタケとの境界は守られる。これは、不完全な使田権とでもいってよいであろう。近年、女衆も高齢化し、いまでも丹誠込めたカワラバタケを維持できなくなって放棄する人も出てきた。その際、アラスにしようのもったいないし、そこを自分のものとし続けることもできないので、隣接してカワラバタケをやっている人や、つきあいのよい人にカワラバタケを「譲る」ということがある。

本来、誰の土地でもなく、誰でもカイタクできる土地であるが、その場所から離れたと誰が使っているかわからないことも多い。細かく利用している限り、その使用者の匿名性は別に問題にならないが、普通に人に大きくカイタクしたときには、「誰が広げたのか」ということが問題になるのである。明文化されてはいないが、暗黙の緩やかな“決まり”によってその面積、用途は律せられているといえる。

何とは決まってはいるが、たいていこういふときは、譲られる側は、ビール1ケースとか、プラスチックのパケツとか、ささやかなお礼をするものであるという。これもまた、緩やかな“決まり”である。カワラバタケの使用権は売買されるものではなく、歴年の

働きかけに対する評価も、厳密に下されるものでもない。譲り受けた側からの対価は、あくまで、いままですべてのものをただで貰うということに対する道徳と、感謝が満たされる程度のものである。この点からも、その使用権のあり方は不完全であるといえる。

このように女衆は、不完全な開拓技術と使用慣行によって、河原という空間の特質を変えない、あるいは乗り越えないあり方で、菜園づくりを維持している。それは、緩やかな“決まり”といった程度の仕組みであるが、しかし、それはいまでも河原に入ってくる女衆の行動を律している。女衆の菜園づくりは、単に作物という産物を得る行為ではなく、人と人がつきあう行為でもある。

### 男たちの世界 ——川のサケ漁—— 川と人と“つきあう” カワドの漁法

女衆のおやかなるつきあひ方に比べ、男衆の律し方はより厳格である。漁業組合などの組織もあられ、サケを

捕る権利も明確である。

男衆は、秋口からはサケをこの川で捕る。その季節には川に男衆の世界が広がる。大川郷ではサケを捕る男衆を、特にカワドと称する。カワドには、本業の合間にサケ漁を行ったり、あるいは退職して悠々自適の生活をおくっている人が多い。現在は、サケ漁そのものに生活はかかっておらず、存外道楽的な要素が濃くなっているが、かつては紛れもなくそれは漁業の一部をなしていた。特にサケ漁は、単なる個人の営みではなく村落社会の仕組みに大いに規定されるものであった。そして、その川をめぐる仕組みは厳密であるが、一方でサケ漁にあえて不完全さ、不確かさを残すものであった。

大川のサケ漁の不完全さは、いまでもその伝承的技術のなかに見出すことができる。サケ漁が行われている全川のほとんどの河川において、サケを捕る技術はまさに一網打尽にする一括採捕が主流である。網やウライで、数百匹のサケをまとめて漁獲する漁法がその典型で、1か所経漁具を設置し、せき止めるため、遡上するサケを完全に捕ることができ、生産効率ばかりではなく労働効率からいっても非



大川のサケ漁は、サケ漁師がサケ一尾一尾と対峙する点で特徴的である。そのため、それぞれのサケに対する思い入れは、大量に生産するサケ漁とは明らかに違う。自分のサケという意識が強い。



伝統的なサケ漁を説明するエビス様をめぐる観念の世界は、カワドに意味をもって受け止められている。そのため、コドのエビス様にエビス様の御札を巻く。



折りを込めてとりつけられたエビス様の御札。

常に有利である。サケを商品として流通させる仕組みが早くから形づくられた地方では、江戸時代からそのような大規模な漁法が、富農や商人らの独占的な資本をもとに展開されている。サケ資源の保護管理を担う国や県などの行政もそれを推進してきた。

ところが、大川では、コドやモッカーと呼ばれるいかにも古めかしい伝統漁を中心にサケ漁が行われている。これは集魚装置にサケを誘い込み、一尾一尾をカギでかき取る漁法で、小規模、個人的である点で特徴的である。カワドひとりひとりが、サケを1尾ずつかき取るこの漁法は、近代漁業技術史のなかに位置づけると明らかに非効率的であり、全国一帯のサケ漁河川の漁法と比べ生産性は低い。では、このような不利な漁法を、なぜ大川沿岸の人々は続けてきたのであろうか。

もちろん、大川沿岸のカワドたちが、技術の発展に対して、無知であったのではない。サケをたくさん捕ることに

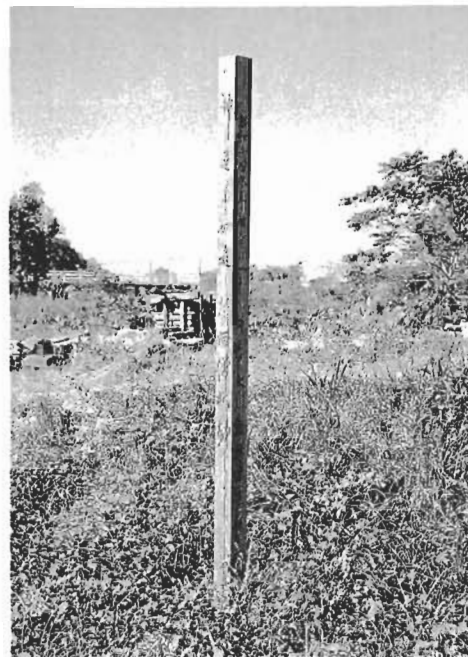
無頓着であったわけでもない。また、伝統漁法に対し、ノスタルジックな価値を認めたものでもなければ、その文化的価値を評価したものでもない。むしろ、その漁法の低生産、非効率という不完全さ自体に価値を見出していたのである。

サケを漁獲する機能に注目して大川郷の人々は、川をサケガワ(鮭川)と呼ぶ。川沿いの9集落ごとにサケガワを厳密に「漁場区」に分け、さらに集落内で個人の漁場に区分けし、人札で個人に配分しサケ漁を行う。かつては、サケを売って買った代金はそれぞれ個人のものであったが、人札で集まった昔川はムラの自治運営費(ムラマンゾウ)に充当されていた。そのため、サケとサケガワは集落に帰属する共有の財産としても考えられていた(あくまで法によって保障されたものではなく、在地の慣習の威を隠さるものではない)。

この集落と個人という二重の位相

に立ちあらわれるサケ漁の権益を守るためには、生産効率のよい漁法は、必ずしも適当ではなかった。なぜならば、サケは遡河性という習性を有する魚類だからである。サケという資源は均質に集落ごとの「漁場区」に存在しているのではなく、下流から順に排除されている。簡単にいうと、下流集落ほど多くの資源に恵まれているのであって、上流集落は下流集落の漁獲した残余を漁獲する機会しかもたない。したがって、効率のよい漁法を下流集落で用いたときには、上流集落ではサケを捕る機会が極端に減少するのである。当然、ひとつの集落内部でも、上下流の有利不利が生じてしまう。

事実、古く18世紀末にはこの地の河口集落に、「流網」という大規模で効率のよい漁法が一時導入されたが、それはこの地の川をめぐる仕組みに適合せず、すぐに消滅している。「流網」の導入後、上流集落への遡上



カワドは「サケ千本揃ると、人ひとり殺したのと同じ」と語る。その言葉を恐るためのサケの千本供養祭が河原には立てられている。このような意識からもカワドとサケの深いつながりを垣間見ることができると。



家のエビス様の神棚には、サケの豊漁を願って、供え物と灯明、御神酒を焼きさない。そして捕れたサケは、エビス様に一度供えられてからようやく人々の食卓に上る。

放が激減したため、上流集落の人々は大卒して河口集落に押し寄せ、「流網」の使用を差止めた。現在の大川に見られる伝統漁法は、意図的な選択によって不完全さを残した漁法なのである。それは人と人のつきあいのなかで決められてきたものなのである。

もちろん、経済性だけに注目するならば、下流集落で一網打尽にしてその売却代金を上流集落へと分配したほうが、効率はいまであろう。しかし、大川郷の人々は、経済的なファクターだけではなく、「サケを捕る」という行為自体を放棄することなく留保したのである。そのため、川に対してそれぞれの集落とその構成員は、いまだに自分たちの川として保全の意識を強くもっている。これは、あくまで使川を前提とした保全意識であるが、サケを捕るという行為があるからこそ、川を守らねばならないという意識が強く顕在化している。

### サケをめぐる人と神のつながり

このような不完全なサケ漁を行うと、当然、サケという資源は、かなり不確実性をもった資源となる。いつ、どれだけ、誰が捕るかかわからないものとして、サケは留め置かれるのである。この不確かさは、サケの経済性が低下したいまとなつては、サケ漁のなかにエキサイティングな競争性を生み出すのに寄与し、現実にも生かされている。サケが確実に捕れる産物ではないという意識は、経済として重要だったころから存在した。それは、カワドたちが「サケは、各家のエビス様に供

えられるために、川を遡ってくる」と語ることも明らかである。

遡ってきたサケはあらかじめ供えられるエビス様が決まっているものとされる。そのため、どんなにコドの家の難しいところにおいても、自分の家のエビス様に供えられるために上ってきたサケは、確実にカギにかかるとされ、逆に見目の前にいてかき取りやすいようにじっとしているサケでも、他家のエビス様に供えられるために上ってきたサケは、どうあがいてもカギをかくぐって逃げてしまうといわれている。このことから「サケにはゲタジシ(家の印)」がついているとまでいわれるのである。このような伝承的言説は、古くからこのサケ漁に、人力では超えがたい不確実性を認めていたことを示している。

こういう語りがあるものだから、カワドは執拗なまでにエビス神とかかわる。まず、サケ漁の口開けを祝うコドハジメにおいて、エビス様の御札が



男衆は、サケが到来するずっと前の夏のうちから、自分の漁場をきれいに整え始める。サケが寄ってくるように川底の砂泥をかきあげ、サケの好む玉砂利状の川底へと、丹念に作りあげていく。



サケガワの入札時、カワドはこぞって川を見回る。隣集落との境界を確認するとともに、川の状態をしっかり鋭い目で見極める。彼らによって、川は見守られているのである。

川へ流され、その年の豊漁が祈願される。このとき、コドの構造上の中心的支柱であるエビス杭にエビス様の御札が巻かれる。また、サケ漁を行う際の漁小屋コド小屋のなかにエビス様の神棚が設えられる。実際に漁を始めると、サケをかき取るカギにエビス様の御札を巻き、捕らえたサケをナウチボウという枠で殺戮する。この様子は「オエビス、オエビス、オエビス」という叫び声のもとに行われる。その後サケは、コド小屋のエビス様の神棚に供えられ、次いで家のエビス様の神棚に供えられる。それが終わって、ようやくカワドたちはサケを調理することができるといふのである——実際、ここまで徹底してやる人はそれほど多くはないと思うが——。

このような人念をカワドとエビス神とのかかわりは、サケ漁の不確実性を表現するものであり、その不確実性は神という観念的世界で合理的に解釈されている。サケは、人間が完全に支配しきれない魚なのではなく、エビス様の支配する魚なのである。

ここで誤解のないようにあえて述べておくが、大川郷の人々は特別迷信深い、あるいは異常な人々ではない。彼らは現代日本人であり、当然普通程度の科学合理性は身につけている。サケが神聖のために扱われることなど重々承知であるし、サケの生物学的方面については、私たちのように理

市で生活する者では到底おぼえないほどの潤沢な知識をもっている。ここで注目しなければならないのは、仕組みとして維持してきた不完全さが、神の世界の不確実性として語られ得るといふことである。むしろそのほうが、不確実性について説得力ある説明体系となり得たのである。本来ならば、技術の進歩という一元的な方向に突き進めばよい状況に、あえて抗うこの地の社会システムをうまく理解し、説明した結果に過ぎないのである。その意味では、観念的な意識が、直接サケの増加や川の保全に結びつくものではないし、また端からそのような安易な解釈を施すべきでもない。しかし、それでも観念的な語りは、川をめぐる仕組みのあり方を私たちに十分に伝えるのである。

### 伝承的世界から学ぶこと

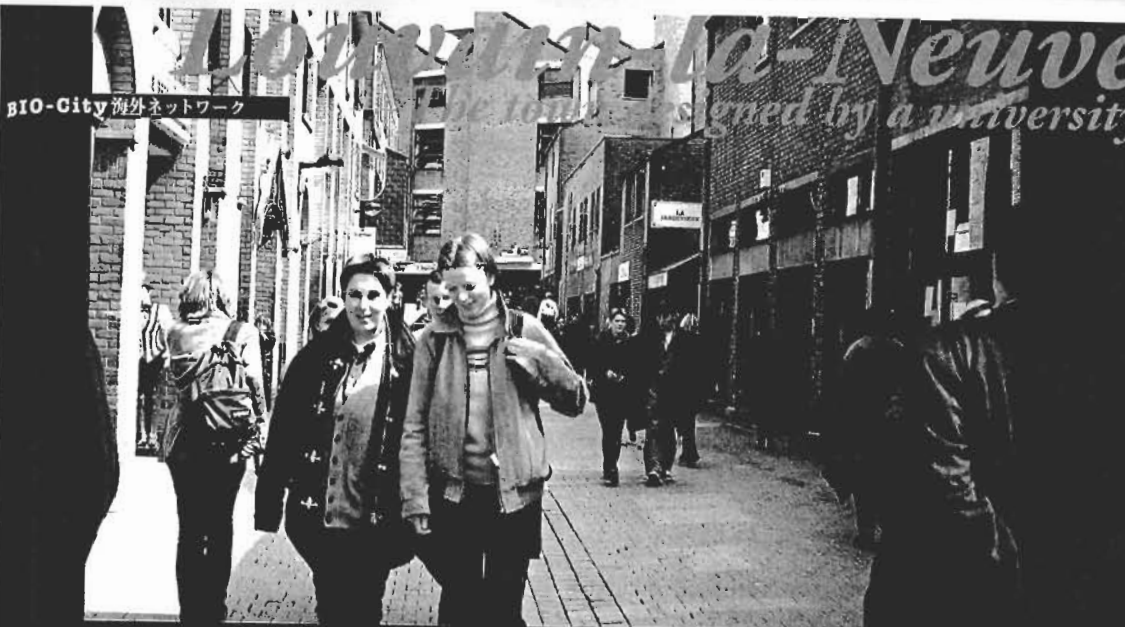
以上のように、自然の豊かな大川には、人と自然のつながりだけではないさまざまなつながりが立ちあわねられている。川をめぐる仕組みによって、このつながりが網の目のように川のなかに張り巡らされている。これは、大川のいまの豊かな姿と無縁ではないが、そのつながりは、自然を守ることを一義的なものとして生み出されたつながりではない。あくまで、自然を前提することによって生み出されたつながりである。

つまり、人間の営みは、自然の保全と必ずしも抵触するものではなく、それどころか保全に寄与することもあり得るのである。当然、問題は、人と自然のかかわりの質や量といったところにある。

逆に人間の営みの減退、すなわち人間から自然への責任あるアクセスの希薄化は、むしろ自然の破壊と結びつくことすらあり得る。ここ山北町も、日本における大多数の中山間地の例に漏れず、過疎化、住民の高齢化という厳しい現状にさらされている。そうしたなかで、川とのかかわり合いも、決して活発にあり続けていくわけではない。もし、そういう状況で、人々が川における営みやめた場合、従来あった川をめぐる仕組みは、川の保全に力をもたなくなる。

このように見ると、近代日本において繰り返されてきた川をめぐる環境破壊は、一面において時代や生活様式の変化により、川をめぐる人の営みが衰退し、人々の関係が希薄になったところに、開発という動きが巧みに食い込んできた結果とも考えられる。また、多くの環境破壊は、多様な自然の破壊にとどまらず、多様な人と人とのつながりをも壊してきたと考えられる。

環境問題という現代的課題は、そのものが人間の関係性の問題であることを、大川の伝承的世界は教えてくれるのである。



## ベルギーの大いなる都市開発の実験 「大学都市ルーバン・ラ・ヌーヴ」

——大学は生きた社会機能——

ルーバン・ラ・ヌーヴはユニークな街づくりを展開している。「大学都市」と称されるとおり、大学と街、そして企業などの研究所（サイエンスパーク）のあいだに境界線がないのである。街がキャンパスなのか、キャンパスが街なのか。「大学は生きた社会機能」という哲学にもとづき、大学自らが都市計画マスタープランを描く——その新しい発想への全貌を、大学、そして構想プランニングチームの全面的協力を得て紹介する。

執筆 ● 砂田向孝 (Koichi Sunada)  
(株)アンズ・コンサルティング代表

取材協力 ● Jean Remy (ジャン・レミー)  
UCL 名誉教授、ルーバン・ラ・ヌーヴ都市計画最高顧問  
Pierre Van Wunnik (ピエール・ヴァン・ウーニック)  
ルーバン・ラ・ヌーヴ専任都市計画コンサルタント  
ブリュッセル都市再生上級研究所教授  
Michel Woitrin (ミッシェル・ワトラン)  
UCL 名誉教授



上：UCLの学生街の様子。左：湖を取り囲む緑。散歩コースとして好まれている。右：ルーバン・ラ・ヌーヴの街並み。湖の側から眺めた景観。

